平成　21 年 2 月 17 日

博士論文審査結果報告書

報告番号　　医博甲第 2034 号

学籍番号

氏　　名　　笹野　京子

論文審査員

主　査（教授）　坂井　明美　　印

副　査（教授）　島田　啓子　　印

副　査（教授）　稲垣　美智子　　印

論文題名：Experience of primiparous women who continued breastfeeding for three months

（3 か月間母乳哺育を継続した初産婦の体験）

論文審査結果

論文内容の要旨：本研究は　初産婦の母乳哺育の継続体験を明らかにすること、またその体験をパターンに分類し、特徴を明らかにすることを目的とした。方法は半構成的面接により得られた質的データをグラウンデット・セオリー・アプローチで分析し、パターンの分類は 1 事例毎に経過を追い分類し、量的データからその特徴をみた。参加者は、母乳哺育推進に取り組む 1 施設で出産した初産婦 15 名である。その結果、3 か月まで母乳哺育を継続した初産婦の体験は、【自然で母親の務めとしての母乳哺育の位置づけ】【疲労の中にありながら授乳能力の獲得】【子どもにとって自分が必要な存在であるという自覚】【母乳充足に対する自己判断】【医療者の判断に基づく母親としての価値づけ】【児の成長への一喜一憂】【母親としての覚悟】【子どもを中心とした生活変更の体験】【育児サポートの欲求】【母乳充足への焦りと過希求】【緊張と翻弄】【不自由と工夫】の12のカテゴリーで構成されていた。この【子どもにとって自分が必要な存在であるという自覚】と【医療者の判断に基づく母親としての価値づけ】は、【自然で母親の務めとしての母乳哺育の位置づけ】と対比していた。体験のパターンには母乳哺育安定型パターン、母乳哺育サポート安定型パターン、母乳哺育不安定型パターン、母乳分泌不足感ストレスパターンの4つのパターンがあった。この中で母乳哺育不安定型パターンと母乳不足感ストレスパターンでは、【自然で母親の務めとしての母乳哺育の位置づけ】と【医療者としての判断に基づく母親としての価値づけ】とのバランスがとれないことによりストレスが生じていた。そのため医療者はバランスに配慮した援助を行っていく必要性が示唆された。

審査結果の要旨：本論文の独創性および保健学における意義は以下のとおりである。第1に現在の母乳哺育を推進されている中での母乳哺育の様々な母親の体験を構造化したこと及びその体験をパターンに分け、その特徴を表す取り組みは先駆的であり、今後の母乳哺育への援助を検討する上でも意義は大きい。第2に、母乳哺育を継続する母親が困難に陥る状況は漠然と捉えられていたが、本論文で質的データと量的データから検討し、論理的に説明が可能となり、今後の研究発展に極めて重要な視点を示した。以上より、本論文は博士（保健学）の学位を授与するに値すると評価する。